星の花が降るころに (4)

安東 みきえ

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

去年の秋	昼休み（九月）	放課後
回想 「私」と夏実は銀木犀の木の下で花が散るのを見上げていた。**二人で木に閉じ込められた。** ・銀木犀の花…甘い香り、白く小さな星の形。	**教室の場面** 去年のことをぼんやり思い出していたら、戸部君がぶつかってきた。 ・「私」から見た戸部君…わけがわからない。 **廊下の場面** 仲直りをしようと廊下で夏実を待った。 ・銀木犀の花…お守りのように持っている。 もう香りはなくなっている。 夏実に声をかけたが、夏実は目の前を通り過ぎて行ってしまった。 （私）夏実の他には友達とよびたい人なんていない。	**校庭の場面** 夏実とのことを見られたのが気がかりで、戸部君を探した。戸部君は一人ボールを磨いていた。自分の考えていたことがくだらないことに思えた。 ・「私」から見た戸部君…やっぱりわけがわからない。 戸部君の背はいつのまにか「私」より高くなっていた。

学校からの帰り道
公園の場面 銀木犀は一年中葉っぱがしげっている。二人だけの秘密基地で、ここにいれば大丈夫と思っていた。 おばさんとの会話で、銀木犀は古い葉を落とし、新しい葉を生やすのだと知った。 ・銀木犀の花…縮んで色あせている。 土の上に落とした。 **私は銀木犀の木の下をくぐって出た。**

場面ごとの描写の変化

本文では、銀木犀の情景描写など、ある表現が異なる場面でも登場している。それぞれの場面で対応する表現に注目すると、「私」の変化を捉えることができる。

確認テスト　教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 銀木犀に関する次の各文の出来事を、本文の流れに沿って並べかえなさい。

ア 「私」は、小さく縮んで色あせた銀木犀の花を、土の上にぱらぱらと落とした。

イ 「私」は、香りがなくなった銀木犀の花が入っているビニール袋を、そっとなでた。

ウ 「私」は、甘い香りの銀木犀の花が落ちてくるのを、夏実と二人で見上げていた。

〔　　→　　→　　〕

(2) 「私」についての次の各文の出来事を、本文の流れに沿って並べかえなさい。

ア 夏実との秘密基地だった銀木犀の木の下を、くぐって出た。

イ 夏実と一緒(いっしょ)に、二人で木に閉じ込められた、と言って笑った。

ウ 去年のことをぼんやり思い出していたら戸部君にぶつかられた。

エ 戸部君の背が自分よりずっと高くなっていることに気づいた。

〔　　→　　→　　→　　〕

(3) 本文中の銀木犀の描写からわかることを選びなさい。

ア 甘い香りの銀木犀の花が最後の場面で色あせていることから、「私」が銀木犀に興味を失っていることがわかる。

イ 銀木犀の花を「私」がお守りのようにもっていることから、銀木犀は幸せを呼ぶという言い伝えがあることがわかる。

ウ 銀木犀の花を土の上に落とす「私」の様子から、「私」が過去にとらわれず、前向きに生きるようになったことがわかる。

〔　　〕